



逆転の発想

人口減少と高齢化が進む中で、すべてのハコモノを残すことが無理であることは、日本中の自治体が直面している課題です。しかし、それぞれの公共施設には大切な役割があり、面積を減らしながらもその役割をいかに維持し、サービスを向上させていくのが、各自治体の腕の見せ所になります。

第13号では、富山県氷見市役所の事例を紹介しましたが、また一つ逆転の発想で公共施設の役割を充実させているまちを見つけましたので、紹介したいと思います。

小さな図書館

佐賀県武雄市の [TSUTAYA が運営する図書館](#) は、館内にスターバックスコーヒーが併設され、T-ポイントカードが使えるたり、有料で書籍を販売するコーナーもあるなど、公共施設のあり方に一石を投じるものになりました。様々な意見もありますが、これに続けと、宮城県多賀城市、山口県周南市、神奈川県海老名市、愛知県小牧市、宮崎県延岡市など、TSUTAYA を運営するカルチュア・コンビニエンスクラブ(株)との連携による公共施設が全国各地で次々と生まれつつあります。

これ以外にも、多くの自治体で、住民や議会から「うちのまちにもあのような公共施設を」という要望が上がっていることと思いますが、利用者の増加や満足度の向上など、民間企業との連携で大きな効果を生むことが期待できる一方では、民間企業は採算が取れないものに手を出しません。自治体側にも億単位の投資を求められることとなり、簡単には実現できません。

そんな要望が上がったまちの一つに、栃木県鹿沼市があります。先日、研修講師として訪ねた際の情報等をもとに、このまちの取組みを紹介します。

鹿沼市は、東に宇都宮市、北に日光市と接する人口約10万人、市域



の面積は 490 ㎡と、秦野市の 5 倍近くの面積を持っているソバがおいしいまちです。このまちでも、議員や住民から鹿沼市に TSUTAYA 図書館をという声上がり、青年会議所が前武雄市長を招いた講演会まで行ったそうです。

しかし、鹿沼市もご多分に漏れず財政難です。また、実質公債費比率も全国平均の半分程度と、健全財政を維持してきたまちです。すでに分館 1 館を含め、3 館の図書館がある中で、今後の公共施設の老朽化の進展などを考えると、図書館への億単位の一般財源投資を簡単に行うことはできません。

そこで、こう考えました。「『図書館にカフェがほしい。』ということは、『カフェが図書館であってもいいのではないか。』」という逆転の発想です。

こうして誕生したのが「小さな図書館」事業です。まず、カフェなどのお店を「小さな図書館」にしたいオーナーは、自分の希望する図書を 50 冊図書館から借ります。蔵書になれば新たに購入もしてくれるそうです。これに自分の所有する本も加えて、自分のお店の中に「小さな図書館」を作ります。そして、お客さんは、店で飲食をしながら、ゆっくりと読書を楽しむというものです。



昨年 10 月に始めたこの事業、現在 11 のお店などで実施しているそうですが、お店では図書の貸出しはできない、蔵書にはオーナーの個性が反映されているなど、図書館本体とのサービスの差は残ります。しかし、くつろぎの空間で、自分の好きな飲み物や食べ物と一緒に自分の好きな本を読みたいという願いはかない、また、お店のオーナーにとっては、新規顧客の開拓にもつなげることができる「公民連携事業」となりました。

TSUTAYA 図書館であれば、もっと大勢の市民が喜んだのかもしれませんが。しかし、この事業にかけたお金は、図書館にカフェを併設する費用の数百分の 1、いや数千分の 1 だと思います。多くの鹿沼市民がこのことをどう評価するのか、答えはまだ出ていないと思いますが、普段、表や上から見ているものを、裏から、下から見てみることで、いいアイデアが浮かんでくることをこの事業から教わりました。



公共施設再配置計画は、後期実行プランの策定作業に入ります。前期実行プランに引き続き、シンボル事業を定める予定ですが、職員の皆さんの発想も、ぜひ形にしてみませんか。



つづく